

# リスク管理への取組

## 基本的な考え方

金融機関を取り巻く経済・金融・規制等の業務環境が大きく変化していくなか、様々なビジネスを展開しているSMFGが経営目標・財務目標を達成するためには、業務環境やリスクを的確に認識すること、リスクの分析とコントロールをしっかりと行うこと、適切なリスクテイクを促進することがますます重要になってきています。

SMFGでは、環境・リスクに対する認識をグループ内でしっかりと共有した上で、「リスクアペタイト・フレームワーク」(RAF)と呼ばれる枠組みに沿って、様々なリスクを体系的に管理するとともに、収益を拡大するためにどのようなリスクをどこまで取るのかを明確にしなが、業務運営を行っています。

## SMFGのリスクアペタイト・フレームワーク

SMFGでは、グループ全体のリスクをコントロールしつつ、収益を拡大するために取る、あるいは許容するリスクの種類と量(リスクアペタイト)を明確化することで、適切なリスク・リターンの確保につなげています。

この枠組みがRAFであり、SMFGが持続的成長を実現する上で、重要な役割を果たしています。SMFGでは、このRAFと業務戦略を経営管理の両輪と位置付けています。

また、こうした考え方や具体的なリスクアペタイトを記載した文書を制定し、グループ内で共有しています。

## リスクアペタイト

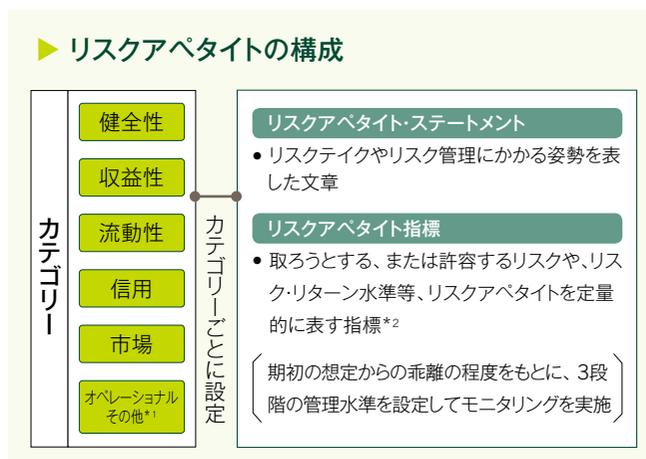
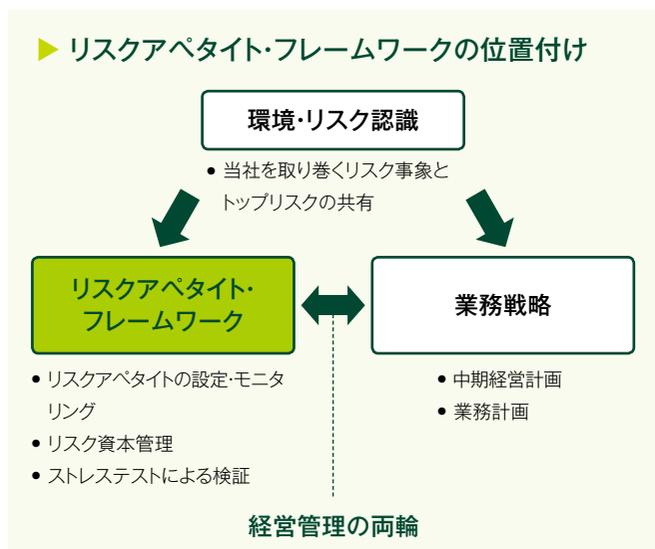
リスクアペタイトは、健全性、収益性、流動性等のカテゴリごとに、リスクテイクやリスク管理にかかる姿勢を定性的に表した文章(リスクアペタイト・ステートメント)と、取ろうとするリスクやリスク・リターンの水準等を定量的に表した指標(リスクアペタイト指標)から成り立っています。

たとえば、健全性のカテゴリについては、リスクアペタイト・ステートメントとして「持続的な成長を支える十分な自己資本を維持すること」といった普遍的な方針と、足許の環境・リスク認識を踏まえた当年度の具体的な方針を掲げるとともに、リスクアペタイト指標として「普通株式等Tier1比率」等、複数の指標を設定しています。

## リスクアペタイト・フレームワークの運用

各事業年度のリスクアペタイトの設定にあたり、グループ経営会議および取締役会において、まずは、足許および将来の業務環境やリスクについてしっかりと議論を行い、認識を共有し、特に、経営に対して重大な影響を与えうるリスクは「トップリスク」として選定しています。その上で、ストレステストによるリスク分析の結果等、リスクが顕在化した場合の影響も踏まえながら、リスクアペタイトを決定し、これに基づき業務戦略・業務運営方針を策定しています。

また、期中の業務運営では、トップリスクを含む環境・リスク認識を随時更新しながら、リスクアペタイト指標等の管理を通じ



\*1 コンプライアンス、事務リスク、システムリスク等に係る事項

\*2 別途、リスクアペタイト指標の変動の予兆やリスクの状況を把握するための指標を設定し、モニタリングを実施

て、リスクアペタイトの状況を定期的にモニタリングし、グループ経営会議および取締役会に報告しています。

なお、リスクアペタイト指標のモニタリングにおいて、指標の水準が期初の想定から著しく乖離する場合等には、必要に応じて、リスクアペタイトや業務戦略の見直しを検討しています。

### 総合的なリスク管理

SMFGでは、RAFの運営の実効性を確保するため、トップリスクを含む環境・リスク認識をしっかりと行った上で、ストレステストによるリスク分析やリスク資本管理の枠組みを通じて、体系的なリスク管理を実施しています。

### 基本的な考え方

SMFGは、グループ全体として管理すべきリスクの種類を下表の通り、①信用リスク、②市場リスク、③流動性リスク、④オペレーショナルリスクに分類し、各リスクの特性に応じた管理を実施しています。

さらに、持株会社の三井住友フィナンシャルグループでは、グループ会社が各々の業務の特性等に応じて、管理すべきリスクの種類を特定するよう必要な指導を行っています。管理すべきリスクの種類は随時見直し、環境変化に応じて新たに発生したリスクを適宜追加しています。

### トップリスク

主に1年以内に発生しうるリスクのうち、経営上特に重大な影響があるリスクを「トップリスク」として選定しています。トップリスクの選定にあたっては、候補となるリスクを幅広く収集した上で、それぞれのリスクについて、経営に与える影響やリスクが発生する可能性を評価し、後述のリスク委員会、グループ経営会議、取締役会で十分な議論を行っています。

こうしたプロセスを通じて、グループ内で環境・リスク認識を共有するとともに、トップリスクに選定された各リスクへの対応状況を確認することで、リスク管理の高度化に取り組んでいます。

SMFGでは、トップリスクのひとつとして「サイバーリスク」を選定しています。これは、サイバー攻撃の高度化・多様化、並びに、攻撃を受けて情報システムがダウンした場合の社会的影響の大きさ等を踏まえ、経営の最優先課題のひとつとして位置付け、攻撃発生に備えた対応態勢強化に努めているものです。

### ▶ 管理すべきリスクの種類

管理の枠組み	カテゴリー	
リスク資本による管理	信用リスク	与信先の財務状況の悪化等のクレジットイベント(信用事由)に起因して、資産(オフ・バランス資産を含む)の価値が減少ないし滅失し、損失を被るリスク
	市場リスク	金利・為替・株式等の相場が変動することにより、金融商品の時価が変動し、損失を被るリスク(バンキング・トレーディングリスク、政策投資株式リスク等に分類)
	オペレーショナルリスク	内部プロセス・人・システムが不適切であることもしくは機能しないこと、または外生的事象が生起することから生じる損失にかかるリスク(事務リスク、システムリスクを含む)
資金繰り計画／資金ギャップ	流動性リスク	運用と調達の間隔のミスマッチや予期せぬ資金の流出により、決済に必要な資金調達に支障をきたしたり、通常より著しく高い金利での調達を余儀なくされるリスク
リスク特性に応じた管理	その他リスク(決済に関するリスク等)	—

# リスク管理への取組

## ストレステスト

金融機関の経営環境は常に変化しており、時に多大な影響を受けることがあります。SMFGでは、フォワードルッキングなリスク管理を行うために、ストレステストの手法を活用して、景気後退や市場混乱等のリスクが顕在化した場合のSMFGの健全性への影響等をあらかじめ分析・把握するよう努めています。

ストレステストでは、前述のトップリスクに加え、専門家・関連部署等による議論を踏まえながら、複数のシナリオを設定しています。

業務戦略を検討する際には、ストレステストを通じて、SMFGのリスクテイク余力を把握するとともに、ストレス下でも十分な健全性を維持できるかという観点から、戦略の妥当性を検証しています。

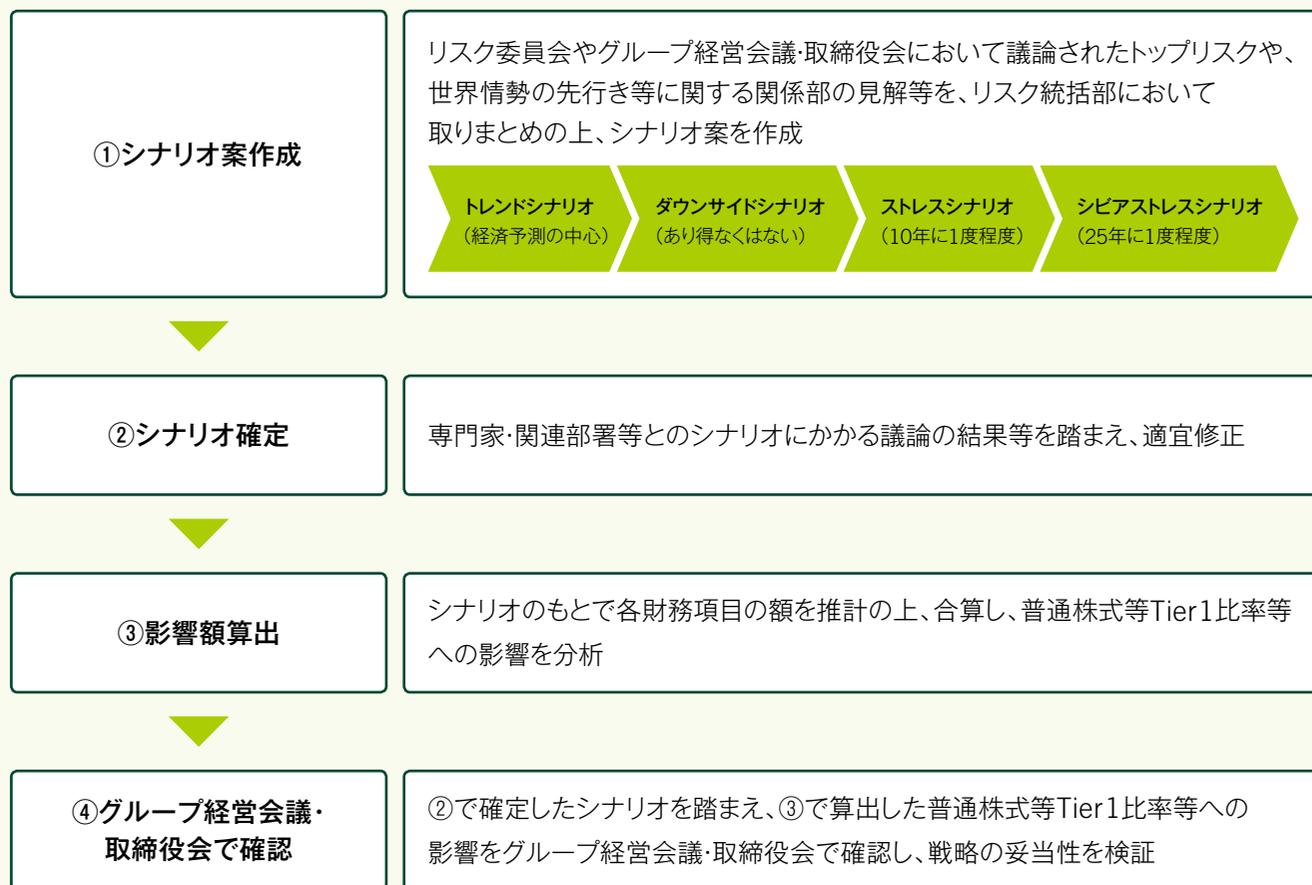
## リスク資本管理

SMFGでは、グループ全体が抱える各種のリスクを、統一的な尺度で統合的に把握して管理しています。具体的には、信用・市場・オペレーショナルの各リスクを、それぞれのリスクの特性やグループ会社の業務特性を勘案した上で、VaR\*<sup>1</sup>等をベースに統一的な「リスク資本\*<sup>2</sup>」として計測し、経営体力（自己資本）の範囲で使用の上限を設定しています。さらに、このリスク資本を用いて、グループ連結ベースで最適な資本配分を行っています。

\*<sup>1</sup> VaR (バリュー・アット・リスク): 金融資産ポートフォリオにある一定の確率で発生する予想最大損失額

\*<sup>2</sup> リスク資本: 業務運営上抱えるリスクによって、理論上、将来発生しうる最大損失額をカバーするために必要となる資本の額

### ▶ ストレステスト



## SMFGのリスク管理体制

### リスク管理の体制

SMFGでは、リスク管理の重要性を踏まえ、その管理プロセスに、経営陣が積極的に関与する体制としています。具体的には、「グループ全体のリスク管理の基本方針」をグループ経営会議で決裁の上、取締役会の承認を得ることとしています。

この基本方針に基づいて、リスク統括部に主要なリスクの管理機能を集約してリスクを管理するほか、各種リスクの横断的なレビューを強化する等、リスク管理体制の高度化を図っています。また、監査部がリスク管理の状況について内部監査を実施し、検証する体制としています。

なお、傘下のグループ会社においても、この基本方針に基づき、業務の特性に応じたリスク管理体制を構築しています。

たとえば、三井住友銀行では、管理すべきリスクとして、前述の信用、市場等の各リスクに「決済に関するリスク」を追加した上で、リスク管理担当部署を定め、リスクカテゴリーごとにその特性に応じたリスク管理を行っています。

### リスク委員会

取締役会の内部委員会として、社内外の取締役や専門的な知識を有する社外の有識者をメンバーとする「リスク委員会」を設置し、定期的を開催しています。

リスク委員会では、トップリスクやRAF等を含め、リスク管理やコンプライアンスといった幅広いテーマについて、専門的な観点から議論を行っており、その結果はグループ経営会議および取締役会に報告され、経営に反映される枠組みとなっています。

## ▶ SMFGのリスク管理体制

